◉連載論説

歴史と神話への視座

——疑古派禹天神論の検証からの再出発——（下の二）

中島敏夫

十一

疑古派の主張は辨偽の学を根拠にし、それに裏付けられて成立した。辨偽の学は唐宋に芽生えた。それには確かに聖域であった文献の偽を指摘する面があった。しかしその後、清初から今日に至る四、五〇〇年に及んだその学の展開は、あまりに度を過ごしたというべきなのだろう。先秦文献はそのほとんどが偽とされ、完膚ない有様であった。残ったまともな文献は『詩經』くらいである。『尚書』「堯典」「舜典」と『論語』「堯曰」篇は禅譲を述べ、禅譲説は墨家に始まる、故に両者は偽である（顧頡剛「禅譲説は墨家より起こる考」[1]）。『老子』は『呂氏春秋』に出てこない。だから『老子』は偽で、漢初に作られたものである（顧頡剛「『呂氏春秋』従り『老子』の成書の時代を推測する」[2]）。『左傳』は劉歆によって作られた偽書である（顧頡剛「五德終始説下の政治と歴史」[3]）。「五行」は戦国末、鄒衍に始まる。すべて「五行」「五」の説は、戦国末以後のものである。従って、『尚書』「洪範」は偽である。「九州」は秦始皇帝の中国統一時期の状況である。「九州」を述べるものは戦国末から秦漢にかけてである。従って『尚書』「禹貢」は偽である、等々である。偽書とする辨偽の学の状況はすでに本論（下の一、九章）で紹介した。そこに突如激震が襲った。辨偽の学によって後の世に偽作されたとされたものが、二〇世紀後半になって、戦国から漢初にかけての墓中より実物が出土したのである。それら〈偽書〉は古代史の真の

資料としては使えないとされて、文献記載の内容は否定されてきた。それが疑古派の主張だった。その辨偽の学と疑古派の主張に、一挙にその根拠を失う事態が起こったのである。今ここでは、近年に出土してきた大量の簡帛の全体の状況について述べよう。紙面の制約もあるので、ポイントをしぼって要点を記す。

二〇世紀になって、殷墟、秦の始皇帝の兵馬俑、馬王堆漢墓と続々と出てくる考古学の発掘によって、埋もれていた中国古代文明が再びこの世に姿を現わした。後二者のことは最近のことでもあり、記憶されている人も多いだろう。殷墟と甲骨文字の発掘は、「地下のピラミッド」とも言える殷王墓の世界を眼前に蘇らせ、その甲骨文字は呪占と古代漢字の世界を繰り広げて見せた。秦始皇帝の兵馬俑は、統一帝国秦の巨大な権力をまざまざと見せつけ、大軍団の何千人の将兵の生きるが如き姿、一人ひとりの個性に富む容姿をそのままに軍団は地下から姿を現した。馬王堆遺址では、今を溯る二千年余、キリスト生誕に先立つ一七〇余年前の婦人の遺屍が生きる姿そのままにこの世に対面したのである。こうした古代中国文明の燦然と輝く様を目の当たりにして、世界は息を呑み、驚いた。その他、怪奇なマスクの人物像の四川三星堆、大編鐘群の湖北の曾侯乙墓、等々、数え上げれば切りのない遺物が次々と現出した。これら遺址は、いうならば地下の博物館、図書館である。失われた文明の姿を目の前に古代そのままの姿を再現して見せてくれた。従来の歴史は新しく塗り替えられていったのである。

我々は、今ここで、地下から再度姿を見せた文献の概況について見てみる。それは史上に例を見ない厖大で大量なものである。今間違いなく歴史は新しく塗り替えられつつある。今日の学術、特に中国史、文明史、思想史、神話研究は、これら資料を見ることなしには成り立たなくなったと言える。その経緯を見てみたい。

中国史上で大量の簡帛文献の出土は過去に何度かあった。今回の出土は史上で三度目になる。最初の出土は、本論で言及してきた漢初の孔壁書である。秦の始皇帝による焚書坑儒を避けて、当時の学者が簡策を壁中に埋め、文献の喪失を免れさせようとした。これが漢代に入って次々と各地で出土した。『古文尚書』『禮記』『論語』『孝經』等、「古文」（先秦期の字体の名＝秦の篆書と異なる六国文字）で書かれた文献の出土であった。先秦の貴重な文献の一部はそれによって後世に伝わることになった。本論で焦点となっている『尚書』もこの中に入っていた。二回目は西晉の汲冢書である。これは西晉の時（二八一、一説に二七九）、墓泥棒（名を不準とも言う）が河南汲県の戦国晩期の魏の襄王の墓から盗掘。あるいは安釐王の墓ともいう。これが

元になり数十車に載る竹書を得た。その中の『紀年』に「今王の二十年」（＝前二九九年）の記があった。『晉書』束皙傳によると、古佚書16種、75篇あった。皆、竹簡に科斗文で漆書したものであった。「科斗文」とは古文字の書体の一で、漆書による〈科斗＝おたまじゃくし〉型の字の書き方＝最初の頭の部分が大きい＝の字を言う。漆で書くため自然とそうした形になる。晉の武帝はこれを荀勗・和嶠・束皙・杜預に整理編纂作業をさせ、当時の書体で書き写させた。これら書籍はその後の戦乱で散逸したが、『逸周書』『穆天子傳』が現在に伝わる。『竹書紀年』『汲冢瑣語』は輯佚書が編まれている。これらが汲冢書と呼ばれる書籍である。内、『竹書紀年』は戦国魏の国の編年体史である。記事には「益、啓の位を干（おか）し、啓之（これ）を殺す」「太甲、伊尹を殺す」等の儒家が伝える史実とは異なり、その特異で希有な記事が目を引く貴重な文献である（後述）。

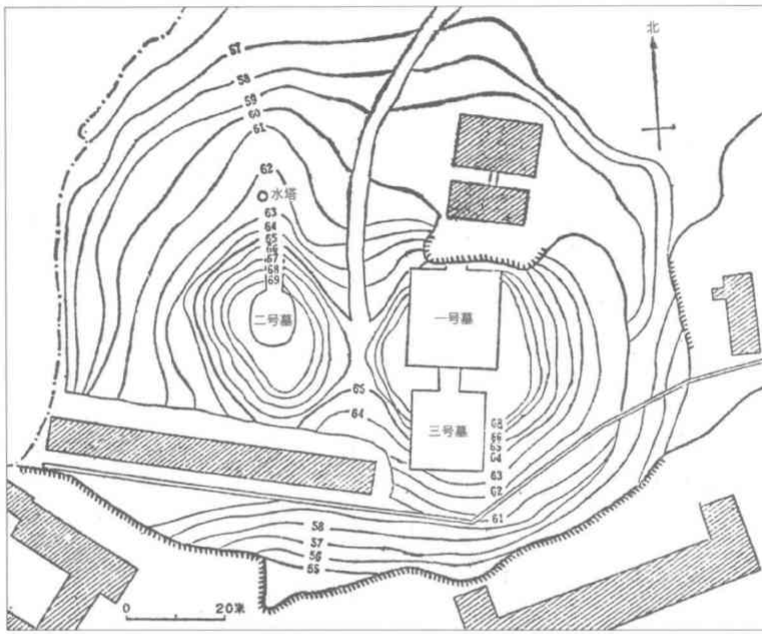
次いで、二〇世紀冒頭の殷墟と甲骨文の発見があり、さらに殷周秦漢時代の金文（青銅器の銘辞）の出土発見も大きな意義を持つ。春秋期の盟書も大量に発掘されている。今から見るのは簡帛出土の状況であるが、史上かつてない規模の大量の出土であり、永年にわたり完全に亡佚していた文献が今蘇ってきたのである。中国学は空前の、まさしく饒宗頤のいう「ルネッサンスを迎えた」とも言える。以下、出土文献を中心に述べる。

まず、馬王堆の三つの前漢墓の発掘状況によって、簡帛出土の具体例を見てみたい。馬王堆は、周知のように二千余年前の婦人の死屍が腐敗することもミイラ化することもなく出土した前漢初期の墓である。墓中から出土した大量の随葬品はまさしく驚異の品々であった。一体、墓主は如何なる人物だったのか。たいへん興味ある問題である。

馬王堆は五代の楚王、馬殷（八五二～九三〇）の墓と伝えられていたが、実はそれを約一千余年溯る漢代の利蒼とその妻及び息子の墓であった。墓中より「軑侯家」の銘文の入った器物が多数出土している。利蒼は軑侯（軑の国を食邑とする「列侯」＝二十等爵の第一位爵が「列侯」）に封ぜられた人物。軑の国は長沙のはるか北方にあり、現在の河南省光山県と羅県の間である。河南省の東南端に当たる。軑侯は四代続く。その初代の軑侯がこの墓主である。漢建国の際の功労により「列侯」に封ぜられたと考えられている。その利蒼が長沙国の丞相に任ぜられた。長沙国は漢建国（前二〇六）の初、異姓（劉家以外の一族）の諸侯が七国建てられた。その一つ呉芮が封ぜられたのが、この長沙国である。その後、長沙王呉以外の異姓の王は全て削られた。その国の丞相は中央朝廷から派遣された国の実権の持ち主である。全部で三墓ある墓の埋葬年代・墓主等は図表21に示す通りである。初代軑侯利蒼の墓は2号墓。妻（五十歳前後）の墓は1号墓。息子（三十歳余）の墓は3号墓

図表21 〈馬王堆墓一覧〉

埋葬時代順	墓番号	発掘年	死亡・埋葬年	墓主
1	2号墓	1973.11～1974.1	漢呂后二年(B.C.186)	軑侯利蒼
2	3号墓	1973.11～1974.1	漢文帝十二年(B.C.168)	利蒼の息子
3	1号墓	1972.1～	(B.C.168の数年後)	利蒼の妻



図表22 〈馬王堆漢墓位置図〉

出所：何介鈞・張維明『馬王堆漢墓』文物出版社、1982年。

である。二代目軑侯は、利豨で、3号墓墓主の兄弟である。利蒼が最初に亡くなっているので、三つの墓共に二代目軑侯利豨の時の埋葬ということになる。発掘順は1号墓、2号墓、3号墓の順であるが、埋葬の年代でいうと、2号墓(利蒼)、3号墓(利蒼の息子)、1号墓(利蒼夫人)の順になる。

馬王堆漢墓はもともと二つの塚が東西に並ぶ形になっていた(1号利蒼墓と2号夫人墓)。図表22参照。二つ共に底径40メートル、高さ16メートル。墓はみな墓中に墓道(墓底に至る傾斜路)を持つ。3号墓は1号墓の南に付け加わる形になって出てきた。1号墓(利蒼夫人墓)が最大で最深である。1号墓について見ると、中には四層の台階があ

り、墓底は長さ7・6メートル、幅6・7メートル、深さ1・6メートル。巨大な椁室（棺の外回りの室）と四層の套棺（棺を囲む外棺）からなっている。基底と椁室の周囲は木炭と白亜ペーストの漆喰で塗り固められており、さらに土を埋めてさらに夯土（土を突き固める工法）されていた。木炭の厚さは50センチ、木炭の総重量は5トン。白亜層は厚さ1・3メートルに及ぶ。これが屍体を腐敗から守っていたのである。この1号墓の随葬品は、その量と質共に殊のほか、驚異的である。だが、ここでは3号墓（利蒼の息子の墓）の帛書にしぼって見ることとする。3号墓出土帛書の文献を一覧表（次頁図表23）とした。参照して頂きたい。

この時代の書籍は、「竹帛」と言われる材料に書かれる。「竹帛」は、「竹書」と「帛書」の二種である。竹書は「簡策」とも呼ぶ。「簡」は普通、竹の一片に文字を縦に書写したもの。一支（＝一本）に一行を記す。「策」（＝「冊」）はその「簡」を紐で結び、一編としたもの。時に大簡も「策」と呼ぶ。簡に対して「牘」がある。木片（木の板切れ）に文字を記したもので、数行にわたる。「帛書」は絹の布に書画を書したものである。

竹木簡の材料は便利で入手が容易である。しかし記載字数は多くなく、容積は大で、書写、閲読、携帯に不便である。秦の始皇帝は毎日目を通した簡牘の公文書は1石（重さ約25キログラム）に達したという。前漢時代、東方朔が漢の武帝に差し出した文章は木牘で3千本、強力の男二人でやっと宮廷に持ち込んだという。一方、帛書の方は軽く滑らか、真っ白で墨で書きやすい。大きさも大小自由で、大きな画も描け、収蔵、携帯に便である。しかし、たいへん高価であった。1匹の絹が6石の米の値段に相当したという。一般の庶民には到底手の出ぬ代物であった。

帛書の実物は二〇世紀の三〇年代後半期に湖南省長沙市子弾庫の楚墓から出土したのが最初である。この帛書は、今はアメリカの博物館にある。これは書籍ではなく、画（中国語で「繒書」）であるが、文字も記される。書籍の帛書の実物が発見されたのはこの馬王堆3号漢墓が最初である。これによって我々は実物の帛書を実際に目にしたのである（図表24参照）。

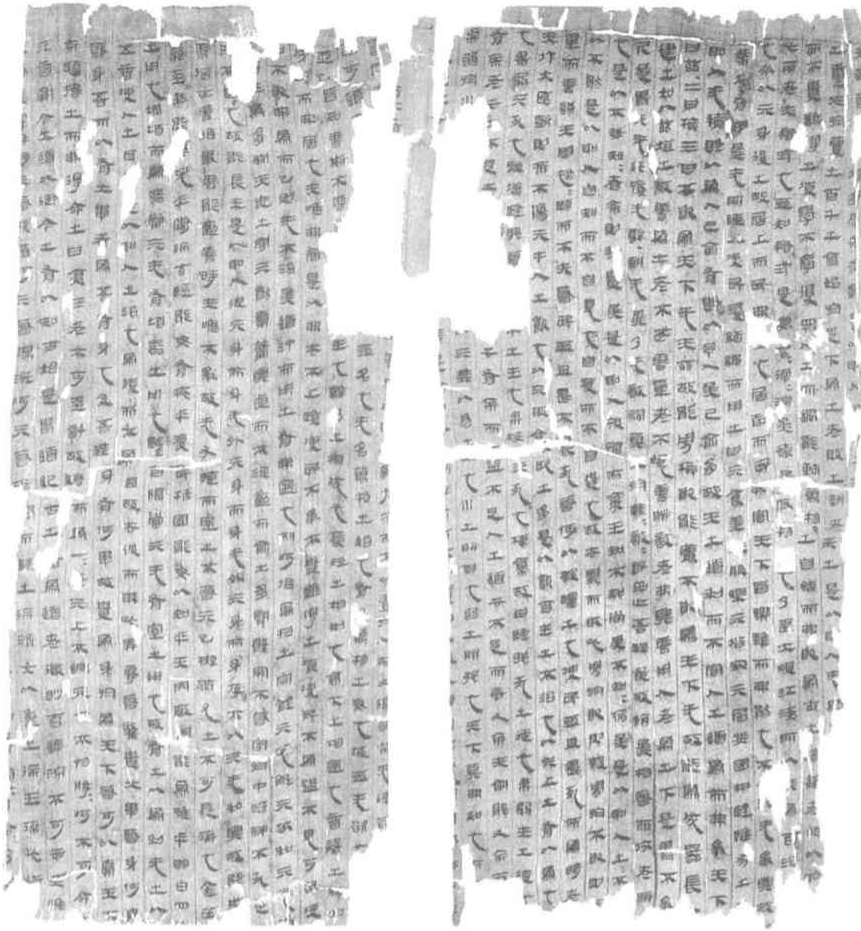
帛書には「全幅」（高さ約48センチ）と「半幅」（24センチ）の二種がある。全体の横幅の長さは書かれたものに応じて決められた。出土時、半幅の帛書が2～3センチの太さの竹木棒に巻かれていたもの以外は、長方形に折り畳まれて漆の木箱中に入れられていた。帛書は横長に置かれ右端から縦書きされる。中には、墨または朱で上と下に横欄が引かれているものもある。また縦に7～8ミリの行線が朱砂で引かれているものもある。全幅のものでは一行に70～80字で、不同である。半幅のもので、一行に20～40字、

図表23 〈馬王堆３号墓帛書〉一覧

分　類	書　　名	内訳(含推定元書名)	字数(約数)
哲学思想	『老子』甲種本		5,400字
	老子甲種本　巻後佚書四種	[五行][九主][明君][德聖]	合計18,800字
	『老子』乙種本		5,467字
	老子乙種本　巻前佚書四種	『經方』『十六經』『稱』『道原』	合計11,064字
	『周易』		4,500字
	周易巻後佚書三種	『要』『昭力』『繆和』	10,800余字
	『周易』繫辭傳		6,000字
歴史記載	[戰國縱横家書]		11,200余字
	[春秋事語]		残存2,000余字
自然科学関係	[五星占]		6,000字
	[天文氣象雑占]		
	[相馬經]		5,200余字
	[五十二病方]		近１万字
	五十二病方 巻前佚書四種	[足臂十一脈灸經] [陰陽十一脈灸經(甲本)] [脈方] [陰陽脈死候]	合計8,100字
	[導引圖]		図１幅
	導引圖巻前　佚書二種	[陰陽十一脈灸經（乙本)] [却穀食氣篇]	1,300字
	[城邑及園寝圖]		図１幅
	[地形圖]		図１幅
	[駐軍圖]		図１幅
雑書	関于刑德　佚書二種	無表題	未整理
	関于陰陽五行　佚書二種	無表題	未整理

凡例：『　』原名称、[　] 現代付与名称

不同。少数の朱砂によるもの以外は普通、墨書される。帛書の全体の横の長さは前記したように長短があり、短いものは、一つの帛書に一点の書（または画、以下同、略）だけが書かれている。横幅の長いものでは、一点の書を描き終わったあと、切断せずに、行を代えて、次の書を書き始めてある。そのため一枚の帛書に通常、数点の書が書かれている。出土した『老子』甲種本には、この後に四種の書が書かれていた。これらは全て亡くなってしまった所謂「亡佚書」（「佚書」「逸書」ともいう）である。これらは「老子甲種本巻後佚書」と呼ばれる。また『老子』乙種本には、その前に佚書四種『經方』『十六經』



図表24 〈馬王堆３号墓出土帛書『老子』乙種本（部分）〉

出所：『馬王堆漢墓文物』湖南出版社、1992年。

『稱』『道原』が書かれてあった。呼び名は「老子乙種本巻前佚書」である。

一方、簡策の方はどうなのか。漢代の簡策の規格についていうと、最大のものは漢尺3尺で、67・5センチ。詔勅・冊命・皇帝発布の律令・暦令に用いられた。一般には、長短二種ある。長簡は、漢尺で2尺4寸（約54センチ）。短簡は、その半分の1尺2寸（約27センチ）。あるいは1尺（約23センチ）。8寸（約18センチ）のものもある。最短のもので6寸。一般に、長いものは経書に用いられ、短いも

のは子類・史書に用いられた。最短の6寸のものは算籌（算木）・伝符（使いのしるし）に使った。さらに短いものもあって、「箋」という。これは読書時のメモ用の注釈に使われた。漢代の注釈の一種に「箋」なるものがある（例えば鄭玄の箋、「鄭箋」という）が、おそらく簡のこの長さに起因するのであろう。全体的に、幅は1センチ（当時5分）、厚さ0・2乃至0・3ミリ（当時約1分）である。1支に30～40字、多くて50字を書く。溯って、近年（一九九三年）出土の戦国中期末の湖北郭店楚簡の形制について見ると、三種あり、32・5センチ、28～28・3センチ、26・4センチである。漢代ともまた相違がある。

帛書は全て3号墓（利蒼の子の墓）より出土。1号墓（利蒼の妻の墓）からも簡策は出土している（竹簡312枚、木楬49枚）。その内容は遣策（随葬品目録）である。夫人屍は1号墓。また「非衣」なる天上・地下・地上の現世と霊界を描いた帛画は、1号・3号両方ともに出土。魂を冥界に導く画であり、木棺に裏向きに掛けられていた。埋葬時に幡のように掲げられて行列を先導したようである。特に1号墓の「非衣」が逸品で有名である。

帛書は全部で約29件、約12万字。3号墓の東側の箱の中より出た。かなり破損していた。帛書は、書体・避諱・紀年・墓埋葬時期（前一六八）から判断して、その抄写は、二類に分けられる。一類、早期のものは、近篆書＝篆書に近い字体で、漢の高祖劉邦の諱を避けないことから、秦漢の間（漢建国＝前二〇六年＝前後）の抄写と思われる。二類は隷書で、諱「邦」を避けて「國」としていて、惠帝（劉盈）と文帝（劉恒）の諱は避けていないことから、漢初から文帝初年（文帝即位＝前一八〇）の抄写と考えられている。

3号墓出土の帛書文献について、要点を説明しよう。

『老子』甲本と巻後佚書、『老子』乙本と巻前佚書：

『老子』甲本及び巻後佚書四種：近篆書。乙本巻前四種佚書：隷書。『老子』甲本は乙本より抄写時は早い。従来の『老子』、即『道德經』が「道」篇「德」篇からなっていたのに、『老子』甲本・乙本では順が逆になっていて、「德」篇「道」篇の順になっており、注目に値する。また書中の章の順序も現行本と違い、帛書本の方が内容的に合理的だと考えられている。甲本巻後四種佚書は原表題なし。内容によって四部に分けられ、『五行』『九主』『明君』『德聖』の名が付けられた。この「五行」は仁・義・德・智・聖の五者を指す。乙本巻前四種佚書は原篇名あり、『經方』『十六經』『稱』『道原』である。内容は刑名と陰陽刑德の学である（名実に沿った刑罰と恩賞を主張する子派の学）。これら文

献は、『漢書』藝文志に著録する『黄帝四經』であろうと考えられている。『漢書』が作られた後に亡佚した佚書である。『十六經』には、黄帝に関する神話、黄帝の臣下たち力牧・閹冉・果童らの記載が載る。これら『黄帝四經』は『國語』越語、『老子』『文子』『鶡冠子』『淮南子』と密接な関連を持ち、また『管子』が収める若干篇とも共通する。『鶡冠子』は唐以来偽書とされてきたが、これら『黄帝書』を見る限り、従来の常識になっていた見解は検討し直さねばならないことになった。

『周易』：

六十四卦の卦の順序は現行本とは異なる。卦名の字も現行本と異なる。例：「乾」（現）→「鍵」（馬）。「艮」（現）→「根」（馬）。仮借の字である。阜陽双古堆（No.18）からも漢簡『周易』は出土しているが、共に楚の地であることが注目される。楚の経学の伝統を引くもので、漢代に入って次第に消滅していったものと思われる。従って、劉向、劉歆二人の知らなかった学であり、その意味で貴重である。

『春秋事語』：佚書。

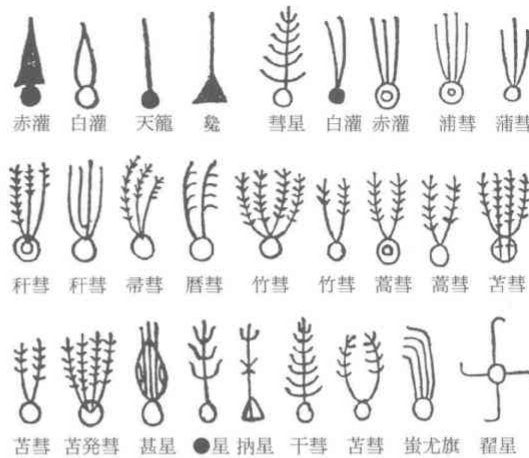
内容は春秋時代の史実の記述。『左傳』に似た書であり、原書名なし。毎章、一事を記し、紀年はない。魯の隱公が弑されたこと、宋の襄公の泓水の戦い等々、『左傳』と歴史的に同じ史実が記されているが、議論は異なる。あるいは『左傳』に記載のない史実も記されている。この内容は、『左傳』の劉歆偽書説を否定するものである。記事より記言に重きがある。

『戰國縱横家書』：佚書。

全27章。うち11章は『史記』と『戰國策』に見える。16章は他の古書に見えず、『史記』の誤りと遺漏を補う。司馬遷も見ていない史書である。

《數術、方技》関係書：『五星占』『天文氣象雜占』佚書。

『五星占』は五星即ち木・金・水・火・土の五つの惑星の前二四六～前一七七間の運行を記し、公転周期を計算して出している。原書名はない。書名は現付与のもの。土星の周期は『淮南子』では28年とするが、この書では「三十歳、天に于いて一周す」という（厳密には29・46年）。図が付いていて、中に例えば彗星の29種類が描かれている。彗頭・彗尾が画かれ、肉眼では見難い彗核まではっきりと描かれている。図表25参照。私は最近のテレビ番組で見たのだが、アフリカ・シベリア等の狩猟民族には、数キロ先の小さな物まで見分けられる視力3・0、5・0、7・0等の驚異的な視力を持つ人がいる。そのことを想定させるような天象観測である。望遠鏡はなくとも、驚異的に精緻な観測がなされていたことを示す観測結果である。後で触れる「距



図表25 〈馬王堆帛書『天文氣象雑占』彗星図（模写）〉
出所：何介鈞・張維明『馬王堆漢墓』文物出版社、1982年。

星」（星座の基準星）がその星座の明るい星ではなく、いわゆる「暗星」であることも、こうした天文観測の実情と関連しているのであろう。

《醫藥》関係書。及び『相馬經』、地図二点。佚書。

『五十二病方』及びその佚書、『脈書』、『引書』、他に養生類。五十二種の病気の詳細な病状、治療法、薬剤処方が記される等々。中に治療法として「禹歩」が多数出るのが注目される。

以上が馬王堆三号墓出土帛書の内容である。

饒宗頤氏は「近二〇年の考古上の新発見、特に大量の楚簡の出土と研究は、二一世紀の中国に自らの文芸復興運動をもたらし、前の一世紀に西方の衝撃によって起こった新文化運動に取って替わるものだ」と指摘している。[6] また蕭蓮父氏は「近二、三〇年出土の簡帛文献の豊富と重要さは空前である。大地の宝物献上はまるで分業するかに見える。一九七二年の臨沂銀雀山（漢墓）は兵書、一九七六年の雲夢睡虎地（秦墓）は法律、一九七二年の武威干灘坡（漢墓）は医学（一九七三年馬王堆帛書にも医学を含む）、一九七三年、江陵鳳凰山（漢墓）は経済史史料。そして郭店楚簡（それに加えて上海博物館所蔵の楚簡と馬王堆3号漢墓）は学術著作である」（蕭蓮父「郭店楚簡の価値と意義」）[7] という。

以下に近年出土の文献の大要を記す。

ここでは、主に、駢宇騫・段書安編著『本世紀以來出土簡帛概術』資料編・論著目録篇[8]と沈頌金『二十世紀簡帛学研究』[9]及び李學勤『簡帛佚籍と學術史』[10]、『中国大百科全書』（文物博物館巻、考古巻）[11]、その他によって二〇世紀になって以来の簡帛出土状況を示した。前掲『本世紀以來出土簡帛概術』によれば、一九九六年までに出土した簡帛出土は計１０６件を数える。ここでは盟書を含め一覧表を作成し

た（図表26）。盟書とは、春秋戦国期に諸侯が自国の卿大夫と誓約を交わし、玉石に書いて盟書とし、神に誓約して地中に埋めた文書である。出土簡帛中、主要なもの46件を示した。記載した項目は、発掘年・地点場所・時代・簡策の種類・枚数・文献名である。戦国・秦時期のものはできるだけ漏れのないようにした。その大まかな全貌が伺えよう。

これら出土簡帛中で最も早期のものを列挙すると、以下である（時代順）。

前四三三＝No.20湖北随県、曾侯乙墓
前三二三～前三一六＝No.30湖北荊門包山、楚墓
前三〇六＝No.17湖北雲夢睡虎地、秦墓
前四世紀＝No.3湖南長沙市仰天湖、戦国墓
前四世紀末＝No.38湖北荊門郭店村、楚墓
一説最早期、竹簡＝No.2湖南長沙市五里牌、戦国墓
前三世紀中葉＝No.4湖北長沙市楊家湾、戦国墓
最早期地図（戦国晩期）＝No.28甘粛天水放馬灘、秦墓
最早期の紙の実物（戦国末～前漢初）紙地図＝No.28甘粛天水放馬灘（戦国末～漢初）秦墓
盟書：（史上、簡策に先立つ書の実物である）
前四九七＝No.24河南温県武徳鎮、沁陽盟書。1万片以上
前四九五～前四八九＝No.7山西侯馬晉城遺址、侯馬盟書。五千件以上

一覧表に記した代表的な出土簡帛を出土地で分類すると、以下である。

湖北17、湖南12、甘粛5、河南3、河北1、山東1、山西1、安徽1、青海1、四川1、江蘇1。他2（上海購入・香港購入）合計46

圧倒的に湖北17・湖南12が多いことが注目される。湖北・湖南は先秦時代の楚の国の地である。全46地点中で29箇所に上る。

以下に重要な出土簡帛中の代表的な13件（馬王堆3号墓を除く）を選び、出土時代順に特徴的な点を説明する。図表26一覧表で欄を太線で囲んだもの。

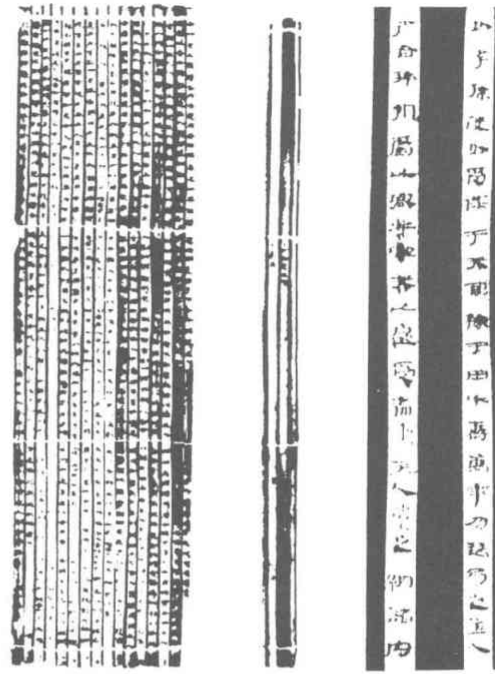
No.5（一九五七～一九五八）［信陽長台関楚墓］（河南）
戦国期楚国貴族の墓からの出土。地は河南省信陽市長台関。特徴ある木彫の鎮墓獣、百余支の竹簡と同時出土の書写用具、遣策（＝埋葬品の一覧表）が出土。

番号	発掘年	地　点	墓名等	時　代	簡策帛書	数　量	内　容
29	1986－1987	湖北江陵秦家嘴	三座楚墓	戦国	竹簡		卜筮祭祷類
30	1987	湖北荊門包山	2号楚墓	戦国	竹簡	448枚	卜筮祭祷記録、司法文書、遣策
31	1987	湖南張家界個人堤遺址	堤遺址	漢代	簡牘	簡牘90片	
32	1987	湖南慈利石板村	36号戦国墓	戦国	簡牘	4371枚	『國語・呉語』『逸周書・大武』『管子』佚文、『寧越子』佚文
33	1989	湖北雲夢龍崗	6号墓	秦代	簡牘	竹簡283枚木牘1枚	法律文書(禁苑・馳道・馬牛羊・田贏・其他五種)
34	1990	湖北沙市関沮	湖北荊州市周梁玉橋遺址博物館	秦漢	簡牘	500余枚	
35	1990	湖北荊州楊家山	135号秦墓	秦代	竹簡	竹簡75枚	遣策
36	1990－1992	甘粛敦煌安西交界、懸泉置遺址	遺址	漢代	簡策	2万余枚	詔書、律令、科品、檄記、簿籍、爰書、劾状、符伝、暦譜、其他古籍、完整冊子40多冊
37	1993	江蘇連雲港東海県尹湾村	2号、5号漢墓	漢代	木牘竹簡	木牘24方竹簡133枚4万字	集簿、「東海郡県郷吏員定簿」、其他
38	1993	湖北荊門市郭店村	戦国楚墓	戦国	竹簡	804枚13000余字	本文に記載
39	1993	湖北江陵王家台	15号秦墓	秦代	竹簡	800余枚	『歸蔵』『効律』『政事』『日書』『災異占』
40	1993	湖北周家台	30号秦墓	秦代	竹簡木牘	竹簡389枚木牘1枚	暦譜、日書、病方
41	1994	河南新蔡葛陵村	平夜君墓	戦国中期(B.C.340前後)	簡策	1500余枚	卜筮祭祷記録及遣策、簡文以事紀年
42	1995	上海博物館購入	香港購入	戦国	竹簡	1200余枚	本文に記載
43	1996	湖南長沙走馬楼	長沙市中心五一広場	三国呉(A.D.232－238)	簡策	簡策10万余	券書・官府文書・戸籍・名刺・帳簿類五種
44	1999	湖南阮陵虎渓山	前漢阮陵侯呉陽墓	前漢	竹簡	1336枚	『黄簿』『日書』『美食方』
45	2000	湖北随州市孔家坡	墓地M8	前漢早期	竹簡木牘	竹簡500余枚木牘4	『日書』、「暦譜」、木牘告地策、其他
46	歴年購入	香港中文大学歴年購蔵	暦年購入	戦国前漢	簡牘	259枚	戦国前漢『日書』、遣冊、奴婢…簿、後漢簡策、東晉木牘等
47	2002	湖南湘西龍山県里耶戦国古城	戦国古城	秦始皇帝25年～秦二世2年	簡牘		多為官府档案文書
48	2003(公布)	甘粛武都琵琶州趙坪村（陝西博物館蔵公布）	博物館蔵	漢簡	簡策	12枚漢簡	有関西北屯戍之事

注：太線で囲んだ欄は本文に記載のもの
依拠：沈頌金『二十世紀簡帛学研究』学苑出版社、2003年、駢宇騫・段書安編著『本世紀以來出土簡帛概術』資料編・論著目録篇、台湾：萬卷樓、1999年、『中国大百科全書』文物博物館巻、考古巻、中国大百科全書出版社、1986年。

図表26 〈近年出土主要簡帛一覧〉

番号	発掘年	地　点	墓名等	時　代	簡策帛書	数　量	内　容
1	1942	湖南長沙市 弾庫	楚墓	戦国	帛書	1枚	名称「四時」「天象」「月忌」
2	1951	湖南長沙市 五里牌	406号楚墓	戦国	竹簡	37枚	遣策類
3	1953	湖南長沙市 仰天湖	25号 戦国漢墓	戦国・漢	竹簡	43枚	遣策類
4	1954	湖南長沙市 楊家湾	戦国墓 M006号	戦国	竹簡	72枚	
5	1957	河南信陽長台関	1号墓	戦国中期	竹簡	229枚	儒家佚書 随葬品遺冊
6	1959	甘粛武威磨嘴子	6号後漢墓	後漢	木簡	514枚	三種『儀礼』、『日書』
7	1965	山西侯馬 晉城遺址	城址	戦国 (B.C.495)	盟書	大量	盟書
8	1965	湖北江陵 紀南城望山	1号墓	戦国楚墓	竹簡	24枚	祭儀文稿
			2号墓		竹簡	13枚	遣策類
9	1972	山東臨沂銀雀山	前漢1号墓	前漢初年	竹木簡牘	4942枚	本文に記載
			同2号墓		竹木簡牘	32枚	「元光元年暦譜」
10	1972	湖南長沙馬王堆	1号漢墓	漢代	竹簡 木楬	竹簡312枚 木楬49枚	遣策
11	1972	甘粛武威旱灘坡	後漢墓	後漢	木簡	92枚	医書多数
12	1973	湖北江陵藤店	1号墓	戦国楚墓	竹簡	24枚	
13	1973	河北定県八角廊	40号漢墓	漢代	竹簡	100余枚	本文に記載
14	1972－ 1974	甘粛 額済納河流域	漢代 城障烽塞	漢代	漢簡	2万枚	詔書、律令、科別、品約、牒書、推辟書、爰書、劾状、各種簿籍
15	1973－ 1975	湖北江陵鳳凰山	漢墓6座	漢代	竹木簡	622枚	遣冊、文書、契約、帳目
16	1973	湖南長沙馬王堆	3号漢墓	漢代	帛書	26件 12万字	本文に記載
17	1975	湖北雲夢睡虎地	11号秦墓	秦代	竹簡	1155支	本文に記載
18	1977	安徽阜陽双古堆	1号漢墓	漢代	竹簡	6000余枚	本文に記載
19	1978	湖北江陵天星観	1号楚墓	戦国	竹簡	70枚	遣策、祷辞
20	1978	湖北随県	曾侯乙墓	戦国 (B.C.433)	竹簡	240多枚	葬儀用兵甲馬車等物品遣策
21	1979	青海大通県 上孫家塞	115号漢墓	漢代	簡牘	大量	『孫子兵法』佚文、其他兵法書多数
22	1979－ 1980	四川青川郝家坪	戦国墓	秦武王 二年	木牘	1件	更修田律
23	1980	湖南臨澧	1号楚墓	戦国	竹簡	数十枚	遣策類
24	1979－ 1982	河南温県（旧沁陽県）西張計村	盟誓遺址	春秋末 (B.C.497)	盟書 (石片)	1万片 以上	沁陽盟書
25	1981	湖北江陵九店	楚墓 乙組 56・621	楚	簡牘		『程』『日書』其他典籍
26	1983	湖北江陵張家山	漢墓247号	漢墓	竹簡	2787枚	本文に記載
27	1983	湖南常徳市 徳山夕陽坡	2号楚墓	戦国	竹簡	2枚	紀年記事
28	1986	甘粛天水放馬灘	5号墓 1号墓	秦・漢初	竹簡	地図7幅、竹簡470枚等	本文に記載



図表27 〈後漢武威竹簡『儀禮』〉

出所：錢存訓『書於竹帛』上海書店出版社、2002年。

1号墓からは竹簡『墨子』の佚篇が発見された。戦国中期のものであり、年代は墨子とそう隔たっていない。墨子は楚の国に行って楚の惠王に書を献上したことがある。戦国中期は楚の地に墨学が盛んであった。

No.6（一九五九）［武威漢簡］（甘粛）武威磨嘴子6号墓出土。図表27参照。

『儀禮』469枚。日忌雑占11枚。『儀禮』：甲乙丙の三種。甲398枚の篇は士相見、服傳、特牲、少年、有司、燕禮、泰射。乙37枚：服傳1篇。丙34枚：喪服1篇。『儀禮』の最古の写本である。他に「王仗詔令」簡、医薬簡牘がある。

No.9（一九七二）［銀雀山漢墓］（山東）

銀雀山漢墓竹簡の発見は中国史・哲学・兵法・暦法・古文字学の研究にきわめて重要な意味を持つ。1号墓・2号墓があり、前漢初の文帝・景帝・武帝期の墓である。文字は隷書。1号墓：前一四〇～前一一八、4942簡、他に残簡。墓主は「司馬氏」。2号墓：前一三四～前一一八、32枚、墓主は「召氏」、『元光元年暦譜』が出土。中国で発見された実物の最古の暦譜である。

出土簡冊には、多数の佚書が含まれる。『孫子兵法』孫子13篇及び佚4篇。『孫臏兵法』佚書。『六韜』多数の佚篇を含む。『尉繚子』5篇。『晏子』16章。『守法守令十三篇』佚書。以上兵書（1号墓）。これら『孫臏兵法』『六韜』『尉繚子』の兵書は、唐宋以来、長い間、偽書とされてきた書であった。

『史記』の中では、孫武について述べた後、「孫武既に死し、後百余歳して孫臏有り云々」と記されているが、この孫武と孫臏をめぐって論議があり、宋以来、孫臏の存在には否定的であった。しかし、顧頡剛は、『史記』中の孫武傳は信頼できない、孫子の兵法は春秋

のものではなく戦国の成書である、孫子の兵法の作者は孫武ではなく、孫臏である。孫武の物語は後人によって捏造されたものであるという結論を出した。[12] こうした宋以来の孫武もしくは孫臏の偽造説は、この銀雀山竹簡で『孫子兵法』と『孫臏兵法』が同時に出土したことによって一挙に解決した。両者ともに真であり、偽作説は誤りであることが立証されたのである。

「唐勒賦」：戦国期末の辭賦の作者唐勒（屈原の弟子の一人）の佚賦残簡。唐勒は宋玉と共に屈原の弟子である。宋玉の辞賦は多く偽とされてきたが、ここの唐勒の賦は実際は宋玉の作「御賦」である。偽と言われた宋玉の作が真であることが判明。「守法」には、墨学の影響が見られる。その文字は多く『墨子』の城守各篇からの引用である。

No.13（一九七三）［定県八角廊漢簡］（河北）

八角廊40号漢墓。戦国末～漢初の墓。文献は『論語』『儒家者言』『哀公問五義』『保傅傳』『太公』『文子』『六安王朝起居注』『日書』。竹簡『論語』は現伝本の大半を保存し、大きな驚きであった。最古の『論語』である。『文子』竹簡は、『文子』偽書説を完全に覆した（本論下の一参照）。さらに『孔子家語』の祖本と見られる書があった。『孔子家語』は早く失われ、今本は三国魏の王肅が編纂したものと伝えられていた。『六安王朝起居注』は漢、宣帝五鳳二年（前五六年）正月の起居注（天子の行動記録）。

No.16（一九七三）［馬王堆3号漢墓帛書］（湖南）上述

No.17（一九七五）［雲夢睡虎地秦簡］（湖北）

湖北省雲夢県睡虎地11号秦墓中出土。出土竹簡１１５５支。律令・暦譜等10種：『編年記』『語書』『秦律十八種』『効律』『秦律雑抄』『法律答問』『封診式』『爲吏之道』、甲種『日書』、乙種『日書』が出土。『日書』というのは占卜の書である。時日を選び、出行・裁衣・見官・建築等の日を占う書である。民衆の日常生活や習俗を知るにはまたとないものである。

No.18（一九七七）［阜陽漢簡］（安徽）

安徽省阜陽双古堆1号墓。前漢前期汝陰侯及びその妻の墓。特に『詩經』（１７０余片）がきわめて重要である。十四の国風、小雅（４首）と『毛詩』に近い１００字の異文がある。従来の四家詩（毛詩＝古文学『詩經』。齊詩・魯詩・韓詩＝今文学の『詩經』）に属さぬもので、『漢書』藝文志にも著録がない、亡佚した『詩經』である。楚国に伝わる『詩經』と思われる。他に『蒼頡篇』（字書、１２０余片）、『周易』（６００片弱）、『萬物』（１３０余片、本草・方術関係）、『作務員程』、『算術』、『年表』（周秦以来の各国君王在位年）、『大事記』（漢初の記事）、『刑德』、『日書』（残片のみ）、『星

占』（残片のみ）、『呂氏春秋』（40余片）、『荘子』（約20片、逍遥遊・外物篇等）がある。出土漆器に、天文観測用の六壬式盤（星座表）、太乙九宮占盤、二十八宿図盤があるのが注目される。

No.20（一九七八）［曾侯乙墓竹簡］（湖北）

戦国早期の曾国の君主、曾侯乙の墓。湖北省随州市西郊の墓。この竹簡は中国史上出土した最古の簡策実物である。字体は楚国文字の体。6696字の書かれた240支の竹簡。簡文には葬儀に用いた車馬・兵器等々の数量、贈呈者等の詳細な記載がある。出土品中には大量の精巧な美術品からなる随葬品約1万点、中でも楽器の大群の編鐘と編磬が圧巻である。現在も演奏可能。銘文から前四三三年やや後と判明。

No.24（一九八〇）［温県（沁陽盟書）］（河南）

河南省温県西張計村、出土の最古の盟書。春秋末期のもの。かつて一九三〇～一九四二年に出土したことがあった。当時、温県は沁陽県だったので、「沁陽盟書」と呼ばれる。現出土盟書は1万余件。盟書中に「晉（国）定公十五年十二月二十七日」（前四九七年一月一六日）の記載がある。

No.26（一九八三）［江陵長家山漢簡］（湖北）

この墓は漢の文帝時の墓。馬王堆・阜陽双古堆よりもやや早い。竹簡2787枚。前漢早期の律令、暦譜、医学、数学等が多数。『算数書』は中国従来の数学書『九章算術』より早い。『荘子』盗跖篇が出土。医学の「導引圖」がある。『暦譜』は出土最早期の暦譜。

No.28（一九八六）［天水放馬灘］（甘粛）には三種の文献出土。［秦国竹簡］［（戦国末～）前漢初紙地図］［戦国晩期木版地図］である。

天水放馬灘からは戦国晩期～前漢初の公共墓地が出土。秦国竹簡は1号墓出土。『日書』『墓主記』の二種。『日書』は甲（73枚）・乙（379枚）二種。『墓主記』は六朝志怪小説の前身をなす死者復活の怪奇譚。前漢紙地図は5号墓出土。注目に値する最古の紙地図。墓主の胸部に置かれていた。紙は良質のもので、墓は秦晩期乃至前漢初の墓。戦国晩期にすでに紙があった可能性を示す。戦国晩期木版地図は、戦国晩期の秦国の木版地図4枚。邽丘県の地図である。

No.37（一九九三）［江蘇連雲港東海尹湾村］（江蘇）

前漢後期墓からの簡牘計17点。うち、「神鳥傅（賦）」20枚は、考古学発掘上の最初の漢代の辞賦作品で、民間伝承の物語である。

No.38（一九九三年）［荊門市郭店1号墓出土］（湖北）

一九九三年一〇月、湖北省荊門市四方郷郭店村から戦国楚墓が出土。随葬品に竹簡804枚、全約1万3千字。文献は13種18篇。内容は主要に儒家と道家の書

である。即ち、『老子』3篇、『太一生水』（以上、道家）。『緇衣』『魯穆公問子思』『窮達以時』『五行』『唐虞之道』『忠信之道』『成之聞之』『尊徳義』『性自命出』『六徳』（以上、儒家）。『語叢』4篇（百家雑抄の説）。以上である。[13]『老子』3篇は現行『老子』の約五分の一に満たない。3篇相互にはダブリはほとんどない。これが原『老子』か、抄本『老子』か、議論があるところである。篇は上下に分かれず、篇名もない。

李學勤「先秦儒家著作の重大発現」[14]によると、次のように指摘する。郭店楚簡は、郭店楚墓1号墓から出土。墓葬の位置は楚の国都、郢（現湖北省江陵県西北の紀南城、楚の都）の墓区。この一帯の墓地の序列はすでに明らかになっており、1号墓は戦国中期後段に属す。前二七八年に郢が秦に占領されるその前で、前三〇〇年（四世紀末）以前である。竹簡の書写の時間はそれ以前である（中島付記＝この時期には孟子（前三九〇〜前三〇五）、荘周（前三六九〜前二八六）、屈原（前三四〇〜前二七八）が生存していたものと思われる。子思・墨子はそれより早く、子思は前四八三〜前四〇二。墨子は前四六八〜前三七六。以上はいずれも生卒年の一説）。墓主は名が知られない。随葬品その他から相当の年齢の人物である。同出土漆耳杯に「東宮之師」とあり、楚の太子の教師であったと思われる。墓の年代を加案すると、太子は懐王の横、後に頃襄王となる人物と想定される。孔子の死後、学は八つに分かれた。子張・子思・顔氏・孟氏・漆雕氏・仲良（梁）氏・孫氏・樂正氏の八学である（『韓非子』顯学篇による）。これらのうち、緇衣篇等の6篇は、そのうちの子思の学であろう。『漢書』藝文志にも『子思子』23篇が著録されており、それだと思われる。子思は孔子の孫の孔伋である。孔子と孟子の間は従来空白となっており、この『子思子』の現出によってその間が埋められることになったと、李學勤氏は指摘する。

No.42（一九九五年）［上海博物館蔵戦国楚竹書］

上海博物館が香港に市場で購入した1200枚余で、古籍には易經、詩論、緇衣、子羔、孔子閑居、彭祖、樂禮、曾子、武王踐阼、賦、子路、恒先、曹邦之陳、夫子答史留問、四帝二王、曾子立孝、顔淵、樂書、魯邦大旱、卜書等の80余種の先秦古籍である。大多数はすでに亡佚した書籍である（『上海博物館藏戰國楚竹書』（全五冊）上海古籍出版社、二〇〇一年一一月以後刊行中、二〇〇四年五月現在、第三冊まで既刊）。

出土簡帛によるものではないが、出土した殷周青銅器の銘文によって偽作説が覆った例として『周禮』を挙げておきたい。従来、『周禮』は偽書というのが常識であった書で

ある。

『周禮』：

『周禮』は漢代以来、その出自・真偽について懐疑的な見方がされてきたが、近代の辨偽の学で、劉歆による王莽のための偽作説がほぼ確定的になっていた。私が学生の頃は、『周禮』及び『列子』『偽古文尚書』が偽書であることは常識中の常識であった。しかし、一九五五年、郭沫若は金文（殷周青銅器銘文）中の官職名の研究によって、『周禮』が戦国晩期の真文献であると指摘した。顧頡剛も同様、金文研究によって自らの過去の劉歆偽造説を修正するに至り、戦国の齊の国等の法家の作とした。その後も青銅器が多数出土し、劉雨氏等は近年出土の多数の両周青銅器の研究からその官職は西周期官制に符合しており、決して戦国時期の作ではないとした。『周禮』の作者は今人が見ることのない多くの先秦典籍によってこの書を書いたと結論づけ、西周から春秋期にかけての官制で、一部、戦国期のものも中に挟雑しているという（張亜初・劉雨著『西周金文官制研究』中華書局、一九八六年。その他）。

以下にこうした近年出土の簡帛資料によって学術上どのような事態が起こったか、それについて簡単に触れておこう。

王國維は一九二五年に「古来の新学問が起こるのはたいてい新発見による」と言い[15]、陳寅恪は「一時代の学術には必ず新しい材料と新しい問題が有る。この材料を取り上げ使って問題を探求し、かくて、この時代の学術の新しい潮流になるのである」と述べている[16]。

郭店楚簡の意義について述べた見解を見てみよう。

張海燕氏「二〇世紀の中国思想史研究」は次のように指摘している[17]。

我々が先秦思想史の幾つかの疑問・難問について正確な認識する上で『郭店楚墓竹簡』のもたらした意義は大きい。それは以下の如き思想史上の問題を提出、解決あるいは解決に近づけた。その一。早期の道家は「仁義」に反対していないこと。「聖人は名教を貴び、老荘は自然を明らかにする」と言われていた。儒・道の両家が淵源のところでもって旗幟を鮮明にし、相互に攻撃しあっていたことは、従来の学者の常識であった。しかし、簡本『老子』の出土に伴ない、この常識を改める必要が生じたのである。その二。「水」をもって元素となす宇宙の起源論を述べている点である。これはギリシアのターレスの宇宙論に似通い、興味深い。中国では初めて見られた思

想である。

李學勤氏は前に記したように郭店竹簡の儒家の文献は子思（孔子の孫、孔伋）の著作『子思子』だと指摘、従来の思想史に存在した孔子と孟子の空白を埋めるものだとの見解を示し、大方の賛同を得ている。廖名春氏はこれら儒家文献を三類に分け、一類『窮達以時』『唐虞之道』『尊徳義』は孔子の著作。二類は孔子の弟子の作。三類『子思子』を子思及びその弟子の作とする考えを表明している。旧来、孔子は偉大な思想家だと認められながらも、彼の編纂した文献と弟子による語録『論語』は存在したものの孔子本人の著作は存在していない。そうしたことを考え合わせると、この指摘は非常に重大な指摘である（廖名春「荊門郭店楚簡と先秦儒学」[18]）。

早期の道家が儒家に必ずしも反対してはいないとの指摘は、次の郭店竹簡『老子』を見れば明らかである。

郭店『老子』と従来の伝本『老子』には、きわめて重要な相異があることが判明した。その一例を見てみると、郭店簡本『老子』第1章は今本『老子』第19章と内容が同一である。両者の『老子』同箇所には以下のように記されている。

【簡本】「絕智弃辯、民利百倍。絕巧弃利、盜賊亡有。絕僞弃慮、民復孝慈。（後五句略）」

（「智恵を絶ち弁舌を棄てれば、民の利益は百倍する。巧妙を絶ち利益を棄てれば、盗賊はなくなる。偽を絶ち配慮を棄てれば、民は孝行慈愛に復帰する。……」）

これが従来の【伝承本（今本）】では「絕聖弃智、民利百倍。絕仁弃義、民復孝慈。絕巧弃利、盜賊亡有」（「聖を絶ち智を棄てれば、民利は百倍す。仁を絶ち義を棄てれば、民は孝慈を復す。巧を絶ち利を棄てれば、盗賊ある亡し」）に作る。違いは、簡本第3句・第4句が後ろの第5句・第6句へ廻されている以外に、大きな違いを示せば、以下の文字の異同がある。

【簡本】　絕智弃辯（智恵を絶ち弁舌を棄てる）
　　絕僞弃慮（偽を絶ち考慮を棄てる）
　　←
【今本】　絕聖弃智（聖人を絶ち智恵を棄てる）
　　絕仁弃義（仁を絶ち義を棄てる）

【簡本】→【今本】：「智」→「聖」　「僞」→「仁」　「慮」→「義」

結局、【簡本】で智恵・弁舌・偽・考慮を棄てるという反文明的な観点はすべて【今本】では聖人・仁・義を絶ち棄

てるという儒家の根本的な規範を棄てることにと変わっているのが読みとれる。ただし、ここで実は問題はまだある。それは「僞」と釈字されている原本の字が果たして「僞」に置き換えてよいかどうかの問題である。原本のこの字は上が「爲」字、その下に「心」に作っており、これはいわば立心偏「忄」に「爲」であり（この字は現在の楷書にはない）、図表28は郭店簡本「絕僞弃慮、民復孝慈」の部分である。龐樸氏はこの字は「一種の心の態で、「為す心態」もしくは「心態の為す」であって行為ではなく、「心爲」である」と説いている。[19] 原字の形からはそういうことになるだろう。一挙に「僞」に直結させるのではなく、より人類的な智恵そのものへの懐疑の表明であるとするこの考えは深思を誘う。また他にこの字を「化」「譌」「義」と釈字する見解もある（廖名春『郭店楚簡老子校釋』[20]）。

図表28 〈郭店竹簡『老子』甲本第一章（部分）〉

上より「絕爲（僞）弃慮、民復孝慈」
出所：『郭店楚簡竹簡』文物出版社、一九九八年。

凡て先秦簡帛テキストの釈字にはこうした複雑微妙な問題がからんでいる。この事態は漢初に孔安國が古文『尚書』を今文に読み替えた時にも存在した事態であったろう。李學勤の「郭店楚簡と儒家經籍」の指摘によると、魯の国は前二五六年に楚によって併呑される。そのため魯の都曲阜には戦国晩年の楚の文物の出土が多い。そこから、孔家壁中の「古文」の竹簡の書もこの楚の文字の系統の字である可能性が強い、と李學勤氏は言う。[21] ただ、軍事的な占領と学術の浸透には一定のずれがあり得よう。

侯才『郭店楚墓竹簡『老子』校讀』は言う。「老子本人は決して儒家の〝聖智〟〝仁義〟を否定し排斥することはなかった。だが、所謂〝聖を絶ち智を棄てる〟〝仁を絶ち義を棄てる〟は、明らかに後の道家の流れによって書き改められたものである。この事実は二千年の長きにわたって続いた老子・孔子対立あるいは老子の反儒の学案（学術案件）を根本的に覆すものである」と述べている。[22] この点は郭店楚簡研究にたずさわる研究者が一様に指摘するところである。

郭店の竹簡が『老子』の原本なのか、その摘抄本なのか。これについては、見解が分かれるところであるが、摘抄本とする見解が優勢であるように思われる。私自身もどちらかと言えば、原本ではなく摘抄本ではないかと思っている。しかし、ここでは、これが原本の足本（欠けたところのない本）とする立場に立つ郭沂氏の論を以下に紹介する。

郭沂「楚簡〝老子〟と老子、公案」[23]一部抄訳

老子は何時の時代の人なのか。『老子』のテキストは何時成書したものか。太史儋は老聃なのだろうか。これらの問題は二千年前の太史公（司馬遷）さえもはっきり言うことのできなかった問題であり、千古の案件を形作っていた（中島付記＝『史記』では老子について、楚の苦県の人で、姓は李、名は耳、字（あざな）は聃、周の守蔵室の吏であると記した後、孔子が老子に会いに周に行った話を記す。老子はその後、周を去ろうとし、関（関所）に至って、関令の尹喜に要請され著書五千言を記した、とある。「（老子の）終わる所を知る莫し」と記す。その後『史記』には「孔子の死後、百二十九年して、史書には、周の太史儋が秦の獻公に見みえ……たことが記されている」とあり、さらに「或るいは儋が即ち老子とも、或いはそうではないとも言う。世間には其の然るや否やを知る人はいない。老子は隠れた君子である」（「自孔子死之後百二十九年、而史記周太史儋見秦獻公曰……。或曰儋即老子、或曰非也、世莫知其然否。老子、隠君子也。」と記している）。

司馬遷以後、不断に学者たちがこの問題に挑み探ってきた。しかし猜疑を重ねて、更に多くの疑問を重ねただけで、問題は依然として残った。老子その人と書の時代については、春秋説と戦国説とがある。太史儋と老聃との関係については、太史儋は即ち老聃だと言う人もいれば、太史儋は、老聃ではなく、著述もないと言う人もいる。

問題は王國維のいう、地下の材料でもって紙の上のことを裏付けるという〝二重証拠法〟によって解決する以外にない。一九七三年に馬王堆漢墓から帛書『老子』甲本と乙本が出土して、学界をどよもした。人々の興奮を誘ったのは当然だった。だが、人々はたとえ新しい事象を見出し若干の旧い説を証明はできたものの、真の問題解決の鍵を発見することはできなかった。

人々は深い失望をもって問題を再度据え置いていた時、再び人の心を突き動かす出来事が起こったのである。一九九三年、つまり馬王堆帛書の発見以後まるまる二〇年の後に、湖北荊門郭店の楚墓から竹簡『老子』が出土したのである。我々はそこに何を見出したか。

このテキスト考察の結論は、簡本『老子』は今本（中島付記＝ここでは「今本」に馬王堆帛書も含む）より優れているだけでなく、原初的な、完全な伝本であり、春秋末期の孔子と同時の老聃より出たものである。且つ、一方今本『老子』は戦国中期の秦の献公（在位前三八四～前三六二）と同時の太史儋より出たものである。歴史上の関連論争はほぼこの大枠でもって合理的な解釈を下すことができる。従って、道家の老聃から荘子に至る変遷の過程、及び先秦哲学の発展の筋道は、再度検討し直

さねばならないのである。

問題は大きく、決して簡単ではない。

郭店楚簡にもう一つ重要なことがある。それは『緇衣』篇と『成之聞之』篇に『尚書』の引用が出ることである。「緇衣」篇に14条、『成之聞之』篇に5条の引用が出る。これは先秦期の『尚書』引用の実物資料では最初のものである。これについては後の章で触れる。

寥名春氏の「疑古と史料審査」文は近年の簡帛出土の状況を踏まえ、中国文学史の観点から次のように総括している。[24]

二〇世紀で主流の地位を占める中国文学史の著作で先秦文学に関する記述部分は、主に疑古学派の認識の基礎の上に打ち立てられた。現在、大学の講義で講述される先秦文学も基本的にはその疑古学派の史料鑑定を基準にしている。多年、我々は疑古の理論を堅く信じ、疑古学派の史料の審査の客観性について豪も疑いを抱かなかったのである。しかし、七〇年代以来の先秦・秦漢の大量の簡帛の出土に伴い、疑古学派の論断は偽であることが一つ一つ立証されていった。諸子散文について見ると、彼らによる『老子』晩出説は鉄案となっていた。だが、七〇年代に前漢前期の帛書本『老子』が出土し、九〇年代に戦国中期その後半期の、楚の『老子』簡策本が世に登場するに至ったのである。また、彼らは、「呉に孫武子あるも、その人は偽なり」「『孫子』13篇は春秋時の書に非ず。その人は齊の孫臏によりて誤てり」と断定した。だが、山東省臨沂銀雀山の一号漢墓より『孫子兵法』13篇及び佚文（亡佚していたテキスト）5篇の残簡（一部分が残った簡策）が出土し、さらに『孫臏兵法』16篇の残簡も出土した。詩歌の方面では、彼らは屈原の存在も否認し（疑古学派の一部の説＝引用者中島付記）、宋玉の多数の賦について宋玉の作であることを否定していたが、前漢前期の墓葬中より『離騒』と『涉江』の残簡が出土。湯漳平らは銀雀山漢簡の『唐勒の賦』の研究を通じて、宋玉の賦の大部分が信頼性を持ち、疑いをさしはさむを得ぬことを立証した。史伝の方面では、帛書の『春秋事語』の出土により、『左傳』の「劉歆偽造説」は笑い話になってしまった。事実は、疑古が間違いなく問題であって、その史料に対する審査の客観性は反省に値するものだと我々に告げている。

辨偽学のどこが間違っていたか。その原因については、後の十四章（『僞古文尚書』の章）で立ち入って述べよう。最近の考古学の成果はめざましいものがあり、十年もす

れば全く様変わりしてしまうほどの日進月歩の急速な進展が見られる。現在（二〇〇四年四月）の時点で言えば、最近の成果は何といっても、郭店出土竹簡の研究の成果である。さらに『𩰫公盨』（一函二冊）の出版がある（二〇〇二年一〇月）。これは保利藝術博物館（北京）が最近収蔵した青銅器を公表したもので、きわめて重要なものである。青銅器の錆を除去した後、始めてその姿がこの世に現れた。専門家の鑑定を経て、この器は間違いなく西周中期偏晩期であることが判明した。これは、禹に関する実物資料中で最古のものであり、かつ中に『尚書』「禹貢」の冒頭部分がそのまま出てくる（後の章で触れる）。さらにこれに加えて、上海博物館が香港から購入し所蔵するに至った簡帛材料が郭店を上回る規模で刊行されつつある。馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』全五冊である。二〇〇一年五月から刊行が始まり、現在（二〇〇四年五月）、三冊が刊行されている。これが全部出そろった後、研究者がこれを本に研究していき、成果が発表すれば、学界に新たな局面が展開すること、これまた間違いない。

注

〈1〉顧頡剛「禪讓説起於墨家考」『古史辨』第七冊下一九三六年所収。

〈2〉顧頡剛「從『呂氏春秋』推測『老子』成書時代」『古史辨』第四冊一九三二年所収。

〈3〉顧頡剛「五德終始説下的政治和歴史」『古史辨』第五冊一九三〇年所収。

〈4〉汲冢出土の古籍は以下の書75篇。『紀年』（＝『竹書紀年』）13篇、『易經』2篇、『易繇陰陽卦』2篇、『卦下易經』1篇、『公孫段』2篇、『國語』3篇、『國名』3篇、『師春』1篇、『瑣語』（＝『汲冢瑣語』）11篇、『梁丘藏』1篇、『繳書』2篇、『生封』1篇、『大歴』2篇、『穆天子傳』5篇、雑書19篇、別に残存7篇。以上75篇（『晉書・束晳傳』）。他に『圖詩』1篇ありとも言う（『中国大百科全書・文物博物館巻』）。

〈5〉主に何介鈞・張維明『馬王堆漢墓』文物出版社、一九八二年、錢存訓『中国古代書籍紙墨及印刷述』北京図書館出版社、二〇〇二年、および『馬王堆漢墓帛書』文物出版社、一九七四年を参考とした。

〈6〉蕭蓮父「郭店楚簡的価値和意義」（『郭店楚簡国際学術研究討論会』湖北人民出版社、二〇〇〇年所収）一三頁所引による。

〈7〉同右、一二―一三頁。

〈8〉駢宇騫・段書安編著『本世紀以來出土簡帛概術』資料編・論著目録篇、台湾：萬巻樓、一九九九年。

〈9〉沈頌金『二十世紀簡帛学研究』学苑出版社、二〇〇三年。

〈10〉李學勤『簡帛佚籍與學術史』台湾：時報文化出版、一九九四年。

〈11〉『中国大百科全書』文物博物館巻、考古巻、中国大百科全書出版社、一九八六年。
〈12〉印永清『顧頡剛書話』引顧頡剛「劍橋格芮菲司（S. B. Griffith）来詢《孫子》書之年代」＝呉少珉・趙金昭主編『二十世紀疑古思潮』学苑出版社、二〇〇三年、三六六－三七〇頁所引による。
〈13〉『郭店楚墓竹簡』文物出版社、一九九八年。
〈14〉李學勤「先秦儒家著作的重大発現」（『中國哲學』第二十輯「郭店楚簡研究」、遼寧教育出版社、一九九九年所収）、一三－一七頁。
〈15〉「最近二三十年中中国新発見之学問」（『王国維論学集』中国社会科学出版社、一九九七年所収）、二〇七頁。
〈16〉陳寅恪『陳寅恪史学論文選集』上海古籍出版社、一九九二年、五〇三頁。
〈17〉張海燕「二十世紀的中国思想史研究」（『中国史研究動態』二〇〇二年第一期）。
〈18〉廖名春「荊門郭店楚簡与先秦儒学」（前掲『中國哲學』第二十輯「郭店楚簡研究」所収）、六九頁。
〈19〉龐樸「古墓新知」（前掲『中國哲學』第二十輯「郭店楚簡研究」所収）、一一頁。
〈20〉廖名春『郭店楚簡老子校釋』清華大学出版社、二〇〇三年、一－九頁。
〈21〉李學勤「郭店楚簡与儒家經籍」（前掲『中國哲學』第二十輯「郭店楚簡研究」所収）、二〇頁。
〈22〉侯才『郭店楚墓竹簡『老子』校讀』大連出版社、一九九九年、六頁。
〈23〉郭沂「楚簡〝老子〟与老子公案」（前掲『中國哲學』第二十輯「郭店楚簡研究」所収）、一一八頁。
〈24〉廖名春「擬古与史料審査」（『中州学刊』二〇〇〇年第二期「出土文献与中国文学研究筆談」所収）。